



道教の符呪 道教儀礼史における 非文字資料研究の可能性をめぐって



丸山 宏 (COE共同研究員 / 筑波大学大学院・教授)

東アジアの宗教文化の中で、道教はきわめて重要であるにもかかわらず、なかなか実態を把握しにくい宗教文化である。道教の深遠な教理や複雑な儀礼、さらには社会における役割について、平明に説いた概説書や詳細な資料に依拠して理解しやすく分析した専門書が、仏教や儒教などに比べて非常に少ないことは否定できないのが現状である。

道教は漢字文化を創出した中国において発展した宗教であり、教理の根本を表現した『老子道德経』自体が文字によって書かれ、近年、従来知られていたよりも古いテキストが出土して、解析が進められているところである。道教とは原初から文字化された媒体で流通した思想体系であったといえるだろう。しかし本稿では、非文字資料研究という角度から、道教の儀礼の中に見られる文字ではない儀礼装置としての符呪、特に符について紹介と考察を加え、研究の可能性を探ってみたい。

ここで言う符とは、本来はある記号を二つに割って、あとで付き合い合わせて確かめるための割り符に由来する。より原理的に説明すると、何かを表すしるしが示されて、しかもそのしるしには対応するところの何らかの求められた現実を生起させ得る力が付与された状態になっていることが重要である。古代中国で兵を動かすときに銅虎符を用いたが、この符を持たなければ皇帝の許可を得ていないことになり軍事行動を起こせないけれども、符を持っていれば皇帝の代理で兵を動かせた。宗教では符は皇帝でなく高位の神や祖師の權威で、鬼神を動かす命令の力を持つことになり、鬼神に対する符命や符敕となる。しるしはそれ自体に神秘的な力があるものとされ、宇宙の原初のうずまく気のエネルギーを示す力強い曲線、いわば文字が文字として立ち現れる前の原初の文字のような形が、朱色の筆で複雑に描かれる例が多い。

なぜ道教の符を問題にするかという点については、いろいろな理由付けができるであろう。歴史的に見て、符を宗教的な用途で利用し、あるいは現在も利用しているのは、道教のみではなく、シャマニズムを含む民間信仰

や仏教も含まれ、漢民族居住地区はもとより、周辺地域の諸民族の巫師、法師、民間の僧侶等もさかんに利用する。そうした広がりをも認めることはできるが、道教が符を用いることは、その歴史の長さ、資料の多さ、現在の儀礼実践における使用頻度と重要性、符に関する宗教理論の精緻さからして、やはり独特の研究価値があると考えたい。

私が調査している台湾の台南市とその周辺地域に伝わる道教儀礼の伝統は、非常に豊かな内容を誇り、地域の安泰を祈る醮の儀礼と死者を地獄から超度する功德の儀礼をよく行っている。それぞれの儀礼で、道の神に仕える高級官僚としての道士は、多くの文書を作成し、神や死者の霊に発出してゆくが、その中で符も多用される。しかも符は儀礼にとっては中枢的な意味を担う。例えば、醮の冒頭で使役するすべての神々を呼び集める時に「玉清総召万靈符命」を用いる。また醮壇を建壇するのに東西南北中央の五方の真文を安置し、散壇するのに真文を回収する。これは主要な儀礼をその内部で行う儀礼空間の五方に、五行の聖なる気を配置することおよびそれを解除することを意味し、『靈宝度人経』という5世紀に成立した道教経典で述べられた宇宙生成の原初に五篇の符が発生して世界を安定させたという壮大な教理内容に即している。

登台拜表という科目では、道士は満身に護身符を貼って天に飛翔し神に謁見する演技を行う。これは剛風世界という高い空の危険な所を通るために必要なこととされる。さらに醮の儀礼では道士が水に符を書き入れて符水を作り、また紙に平安符を書き、村人が自宅に持ち帰る。符をもらう時は、全員の分が作成されてあるのに、人々の表情はいかにも真剣で殺気立ってさえいる。醮の後、村中の家々に平安符が貼られる。

功德の儀礼でもやはり符の力で死者を救済する。功德の儀礼の最初に、道士が神々に発出する文書として「三清七宝宮呈請」があり、これに「すべての符敕は、臣の篆を書いて奉行するを容さんことを」と明言し、道士が

